

**研究紹介** Rhif 3

Ceinwen H. Thomas (1967) 'Welsh Intonation – A Preliminary Study', *Studia Celtica*, Vol. II, 8-28, Cardiff: University of Wales Press.

水谷 宏

著者 Ceinwen H. Thomas のこの論文（以下、本論）は、カムライグ語の音調を研究する上で、先ず、何をさておいても、必ず目を通さなければならない論文である。もっとも本格的な研究に基づく、カムライグ語史上最初のカムライグ語音調に関する論文であるからだ。

話し言葉のリズムや音調に関する研究は極めて少ない。会話書でも、ほとんど扱われていないのが実情である。しかし、実際に会話をしたり、朗読やスピーチをする場合、母音や子音の発音の正確さに加えて、カムライグ語独特のことばのリズムや音調を用いることは、コミュニケーションをより効果的にする上で極めて重要であることは、改めて指摘するまでもない。本格的な音調研究に限らず、カムライグ語の話し言葉の習得を目指している学習者にとっても、本論は極めて有用である。印刷された会話書や、付随のテープ教材では、ただ、物まねをするしか方法のない、リズム・音調に関する学習も、本論を精読することで、カムライグ語のリズムや音調の基本の型が理解でき、学習が飛躍的に向上するはずである。個々の単語の発音や構文が教科書通り正確に言えたとしても、音調を間違えると、その言語を母語としている人達には、時には「許しがたい間違い」と受け止められることもある。その場の状況に適した「話者の心的態度」を表現するのが、音調である。

カムライグ語の学習だけではなく、英語との二言語併用が進み、英語を話すカムリの住民のほうが大多数を占めている現在、その人たちが日常的に使用している「ウェールズ英語」 a variety of English spoken in Wales (しばしば、Wenglish と呼ばれることもある) に、我々日本人として慣れるためにも、カムライグ語のリズムや音調についての知識は大切である。J.C. Wells 博士も、その著 *Accents of English 2 The British Isles* (1982:378) において、イギリス人がウェールズ人の話す英語を耳にすると、まるで「歌を歌っている」ように聞

こえるのだが、それは、ウェールズ人の英語の顕著な特徴が「音調」に見られるからだと言っている。

さて、本論が公表された当時、ごく少数の方言調査結果の公表を除き、カムライグ語の研究対象は、そのほとんどが「文章カムライグ語」 Cymraeg Llenyddol / Literary Welsh であった。従って、個々の単語に置かれる「強勢」 Acen / Accent への言及はあっても、文単位で用いられる音調、特に「話し言葉」 Cymraeg Llafar / Spoken Welsh への言及は皆無に近いのが実情であった。

1960年代後半からは、カムライグ語を話す人々が実際に日常生活で使っている「話し言葉」— Cymraet Byw (生きたカムライグ語) — への関心が、社会的にも高まりを見せていた時代であった。1968年秋、筆者が出席した夜間学級 Dosbarth Nos では、最初の授業で、従来型の「文章語」に基づく授業をされた先生が、授業開始直後に「話し言葉」を教える担当者に交代を余儀なくされた。

本論の研究対象は、「著者自身の母語方言を話す人々、つまり、Cardiff の北方約7マイルの地点、タフ溪谷のナントガル— Nantgarw 地区出身者のみ」であり、明確な言及はないものの、間違いなく、録音による「音声資料」を分析する方法が用いられたものである。その意味でも、極めて画期的な研究だと言わなければならないのだが、その上、以下の事実をも指摘しなければならない。

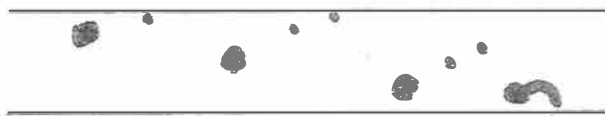
本論は、一般音声学の範疇や概念を駆使して記述している点、当時としては画期的であった。英語を対象にした H. E. Palmer (1922), R. Kingdom (1958), O'Connor and Arnold (1961) 等が応用したのと同じ一般音声学の範疇を適用して、カムライグ語のリズムや音調を記述している。

本論は、「意味単位」Sense Group に基づいてリズム・音調を記述しているが、まず、「音調核」Nuclear Tone については、2つの「下降調」Fall と3つの「上昇調」Rise に加え、複合型の「上昇・下降調」Rise Fall を認めている。さらに、頻度は少ないが「高水平調」High Level と「低水平調」Low Level も存在するとしている。ついで、「音調核」の後に生じる「強勢音節」を「音調尾」Tail として記述する。「音調核」の前に生じる「無強勢音節」を「前音調頭」Prehead としては、「通常前音調頭」Normal Prehead、「高上昇型前音調頭」High Rising Prehead、「高水平型前音調頭」High Level Prehead、「低水平型前音調頭」Low Level Prehead に分類している。構造的には、この「前音調頭」と「音調核」の間に位置する「強勢音節」は「音調頭」Head と呼ばれるが、「上昇型」Rising と「水平型」Level とに分類して記述している。以上の基本的な分類の後、「音調核」が一個だけの「単純型声調」Simple Tune に対して、二個以上の「単純型」を持つ「複合型声調」Complex Tune と、発話の速度やリズム、さらには相互の声の高低の関係から結合するタイプのものを

「混合型声調」 Compound Tune として、豊富な例を挙げている。最後に、「声調均衡」 Balance between Tunes についても、豊富な例を挙げ、論及している。

表記方法は、IPA の「符号」 diacritic marks に加え、声量の最高と最低とを  
実線で表し、その間の「強勢」と「声調曲線」との相対的關係を、視覚的に捕  
捉可能な表記も併記している。本格的音調研究の場合だけでなく、初歩の学習  
者にもとつても理解しやすい。例えば、'Pwy sy'n byw yn y tŷ nesa lawr?' (Who  
lives in the next house down?) のような文は、次のように表記されている。

[ ' pui sin ' bru ən ə ' ti nesa , laur ? ]



是非、本論を参考にして、「話し言葉」の豊かな表現方を身につけていただ  
きたい。